

近江商人の知恵と理念を現代に生かす情報紙

さんぽう 三方よし

第46号
2020/10

特集

講演録

蝦夷地の近江商人

—滋賀大学経済学部附属史料館収蔵史料から

滋賀大学経済学部教授

青柳 周一



豊会館（又十屋敷）の庭園

北海道で多くの漁場を開拓し廻船業などを営んだ
藤野四郎兵衛旧宅の庭園。天保13年（1842）、鈍
穴によって作庭され「松前の庭」と呼ばれる。



豊会館内部の調度品など

CONTENTS

講演録「蝦夷地の近江商人」…………… 2

藤野四郎兵衛のお助け普請…………… 8

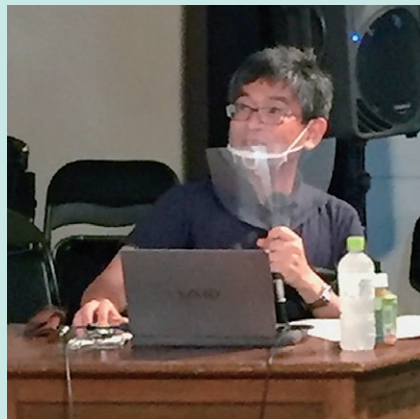
講演

蝦夷地の近江商人

—滋賀大学経済学部附属史料館収蔵史料から

2020年度三方よし研究所では「北海道と近江商人」をテーマとした事業計画を柱としており、コロナ禍の中でしたが、万全の対策に配慮して最小人数で「三方よし講座」を開催しました。滋賀大学教授の青柳周一先生から滋賀大学経済学部附属史料館収蔵の史料から「蝦夷地の近江商人」と題した講演いただき、近江商人が蝦夷地で活躍した背景などについて詳しいお話を聞くことができました。今回の情報紙では特に特集として講演の全部を収録しました。講演後には、幕末の蝦夷に出かけた湖東商人藤野四郎兵衛旧宅を見学し、300年前に北野大地で活躍した近江商人たちの姿を垣間見た一日となりました。

講師



滋賀大学経済学部教授

青柳 周一 氏

1970年生。東北大学文学部史学科卒業。同大学大学院文学研究科博士課程修了。

2001年滋賀大学経済学部にて講師（同学部附属史料館専任教員）として赴任。

2011年より教授。

蝦夷地の歴史と絵図

今回は「蝦夷地の近江商人」ということで、近江の地から蝦夷地に渡った商人たちについて紹介していきます。

蝦夷地と和人地

蝦夷とはかつて日本人がアイヌ民族に対して用いた呼称で、現在の北海道本島は、アイヌの人々の土地であった「蝦夷地」と、松前藩が治め日本人（和人）が居住する「松前地（日本地、和人地）」に分かれていました。

また、アイヌの人々は国をつくりませんでした。蝦夷地は日本とは異なる地域として認識されており、そのため江戸時代の日本地図に蝦夷地は描かれていなかったのです。これは、独立した国であった琉球（現在の沖縄県）についても同様です。日本人は北海道本島の南の渡島半島に比較的古くから進出しており、江戸時代に入ると、渡島半島南部の松前を中心にして松前藩が成立し、松前、箱館（函館）、江差という3つの重要な港が発達していました。

この和人地は、江戸時代前半から時期が下るに従ってだんだんと拡大していきました。そして明治2年（1869）に、蝦夷地は日本の土地であると日本政府

府が布告し、名称も北海道に改められたのです。

記録に見る松前・江差

松前を拠点にしていた大名は松前氏で、かつては蠣崎と名乗り、豊臣秀吉、ついで徳川家康から蝦夷地の管理を許可されてきました。寒冷でコメが育たない環境にあった松前藩は石高を持たず、アイヌ民族と交易をして、入手した物品を本州に販売して藩の財政を賄っていたのです。

松前の繁盛ぶりについては、江戸時代の地理学者・古川古松軒の『東遊雑記』に

「さて松前へ上りしに、案外なる事にて、その屋宅の奇麗なる事、都めきし所にて（中略）貴賤の男女千駄物のごとく（巡見使を）拝見に出し風俗容体、衣服に至るまでも、上方筋の人物に少しも劣らぬ」と記されています。

つまり「地元の住民たちの姿形、衣服など全て上方筋（京都・大坂方面）と変わらず、何てゼいたくな土地なんだ」というこ

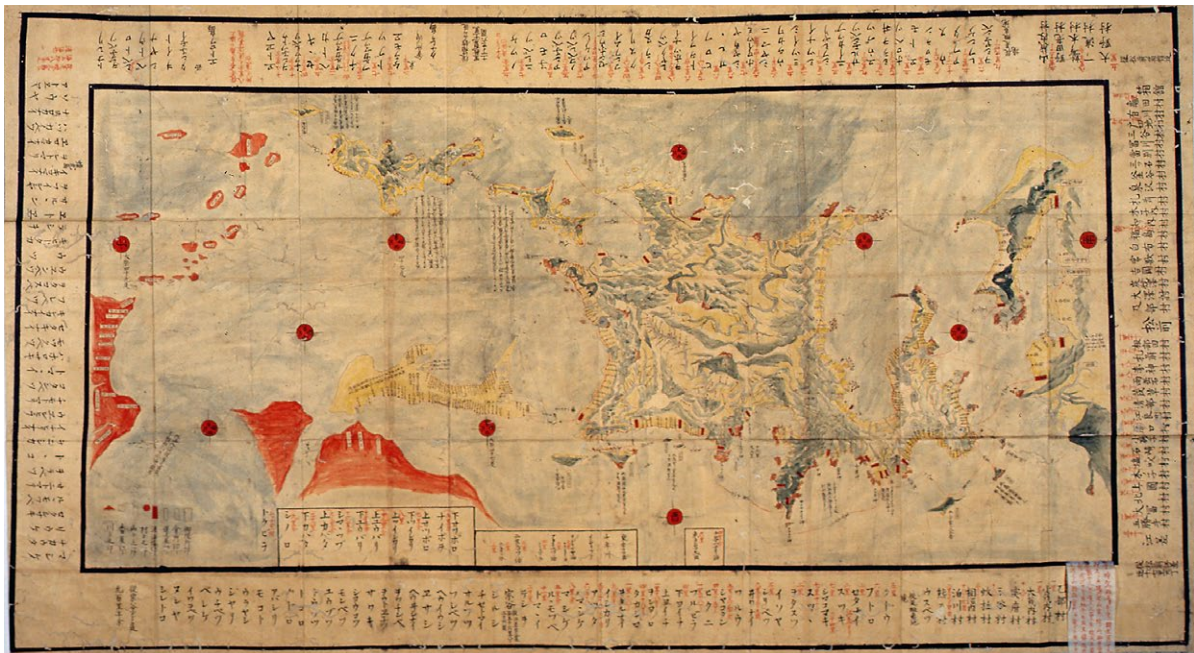


図1 「改正蝦夷地與地路程全図」(柴谷家文書、個人蔵、滋賀大学経済学部附属史料館寄託)

とです。また、江差についても、「江指(江差)と云浦は至てよき町にて、家数千六百余軒、端々に至るまでも貧家と見ゆる家はさらになし。浜通りに土倉幾軒ともなく建ならべ、諸州よりの廻船、此日見る所大小五十艘斗也。町に入り見れば、呉服店・酒店に小間物屋此外諸品店ありて、ものの自由なる事上方筋にかかわらず(中略)委しく間に、近江・越前より出店数多、上方よりのもの多し」というような観察をしています。すなわち、松前や江差は、極めて上方風の文化が栄えている。なぜなら上方と文化的、経済的

に直接結び付く関係にあったからで、それは当然、廻船によるものであって、中でも主力になっていたのが、近江、あるいは越前などからこの地に進出していった商人たちであるということです。なお図1は「改正蝦夷地與地路程全図」という絵図です。これを所有している柴谷家は、彦根市南部の柳川出身の商家で、17世紀前半頃に松前へ渡り、商いを展開した家でした。「興地路程全図」は、柴谷家による蝦夷地での商業活動の中で、具体的に必要とされて作成されたものだったのです。

日本人(和人)がアイヌに交易品として渡していたものには、コメ、酒、衣類、鉄製品、刀などがあります。これに対してアイヌ側からの交易品には、海産物やクマなどの毛皮、ワシの羽や「蝦夷錦」と呼ばれる中国産の絹織物などがありました。

場所請負制の展開

松前藩の商場知行制による交易には、やがて商人たちが介入してきます。つまり、松前藩に運上という一種の営業税を納めることによって、アイヌの人々が住んでいる土地(商場)の経営を商人たちが請け負うようになってきたのです。商人は当然利潤を追求するので、単なる交易だけではなく、利鞘を稼げる活動として、蝦夷地で重要な産業である漁業に注目し、商場よりも広いエリアを「場所」として請け負うようになり、大量の人々を動員して大掛かりな漁業を展開していく段階へと移ってきました。これを場所請負制といい、享保年間(1716～1736)頃には一般化していくのでした。

江戸時代初期、松前藩が成立した当初、アイヌの人々はさまざまな交易品を松前の城下に自ら運び込んできて、松前の城下で取引していました。これを城下交易制といいます。次第に松前藩が藩主の一族や上級の家臣に対して、アイヌとの交易を行う商場を分け与え、そこに松前から商船を派遣して取引する商場知行制という形態に変わっていきます。

つまり、他の大名が藩の中にあって、自分の家臣に対して知行地を与えるのと同じように商場を与えたのです。松前藩はコメをつくっていませんから、そもそも家臣たちに分け与える水田がないので、その代わりに、アイヌの人々と商場で交易する権利を与えるようになります。すると、アイヌの人々は自分の住んでいる場所を離れて、松前にやってくることを制限されます。つまり、和人和と蝦夷地が、はっきりと分かれていくのです。

商人は請負場所での労働力として、アイヌの人々や、ヤン衆などといわれる北東北から渡ってくる日本人を労働力として雇



図2 「白渡シ申舟之事」(岡田家文書、滋賀大学経済学部附属史料館蔵)

用するようになり、鮭やニシン漁が盛んになります。鮭は塩鮭として本州に送られ、当時たくさん捕れたニシンはメ粕などに加工して、肥料として本州に送られ、農業生産力を非常に高めたと言われています。

カズノコも当然ニシンを解体すると採れますが、高級な食材として貴ばれていくのは、おそらくニシンが不漁になり、採れなくなつて以降です。

昆布ロード

蝦夷地の主要な産物としてはコンブがあります。いまでも国内産のコンブの主要産地は北海道です。コンブは主に寒い海の産物ですから、それを松前、箱館といった港から本州に向けて運び出すと、西廻り航路などに乗って、関西にもたらされ、大坂、京都の昆布だし中心の食文化をつくり上げていきました。

しかし、流通の道はこれにとどまらず、長崎などに昆布がもたらされて、中国への主要な輸出品になります。当時、中国は海岸線が長いわりに、コンブが採れる場所がなく、内陸での海藻不足、ミネラル不足を補うために、日本や朝鮮などから大量のコンブを輸入しました。その主要な流れとして、蝦夷地産の

コンブが長崎を経由して中国に行きました。もう一つは、このコンブが鹿児島、薩摩藩に流れ、さらに琉球から中国にもたらされるルートもあります。こうした蝦夷地—日本—琉球—中国を結ぶ物流の道を、研究者は「昆布ロード」などと呼んでいます。

昆布ロードというのは、中国、沖縄を介した極めて大きな流通の道として存在していましたが、場所請負制がつくり出したモノの流れといえます。さらに、この流れとほぼ同じようなルートをたどって、長崎から中国に渡る俵物といわれる海産物も蝦夷地から積み出されていました。長崎から中国に渡つた俵物としては、煎海鼠(ナマコ)を塩水で煮て干したものや干しアワビ、ふかひれなどが中心です。これらは中華料理の高級食材ですが、実は日本から輸出されたものが多いためです。こういったモノの流れの起点が蝦夷地であり、その推進者の中には近江から蝦夷地に渡つた人々がいました。

蝦夷地で商いを行う近江出身の主要な商人としては、柳川村の建部七郎右衛門、田付新助、平田与三右衛門、柴谷文右衛門や、八幡の岡田弥三右衛門、西川伝右衛門などが挙げられます。ここに上がっている柳川、八幡

のほかに薩摩という村の出身者が「両浜組」といわれるグループを結成して、18世紀後半には松前藩へのさまざまな金の貸し付けや、御用金を調達する窓口となつていきます。貸し付けをする代わりに蝦夷地での商業活動において、特権的な立場を占めていきます。つまり、江戸時代の早い時期に、松前藩の場所請負や交易などで活躍したのは、何をさておいても両浜組の商人たちだったのです。

船の購入費を煎海鼠の代金で決済する

先ほど煎海鼠について、蝦夷地から長崎を経由した流れというのを説明しましたが、延享元年から2年(1744年)から1745年頃、長崎から中国へ輸出された煎海鼠は、ほとんどが両浜組商人たちが廻漕したものでした。ですから、この時期には近江商人が長崎貿易の中心を担うような位置にいたのです。

煎海鼠と両浜組商人の関係を示しているのが図2の史料です。岡田弥三右衛門は八幡の商人で、享保15年(1730)に、230石積の船を地元の人々から購入しています。その代金が33両だったのですが、お金に関

※1 坂野・堀井「初代藤野辰次郎について—蝦夷地に渡つた近江商人藤野家の近代」、『滋賀大学経済学部附属史料館研究紀要』52号、2019
https://shiga-u.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=13405&item_no=1&page_id=13&block_id=21

しては松前の煎海鼠の代金で差し引きして済ますとあります。つまり、松前から廻漕している煎海鼠の代金で、このお金は決済しますというように取り決めているのです。

次第に近江商人の勢力が衰退

寛政11年(1799)に東蝦夷地を幕府が直轄化するようになると、江戸などからの商人が蝦夷地へ進出するようになり、両



図3 近江八幡為心町の岡田家旧宅

浜組の特権的な立場が次第に揺らいでいきます。やがて、中小規模の商人などは、この時点で脱落していきます。それでも、八幡の岡田弥三右衛門・西川伝右衛門や豊郷の藤野喜兵衛など、大手の商人たちは生き残っています。

次第に蝦夷地に対しては、幕府の介入が強まり、文化4年(1807)には幕府が松前・蝦夷地全域を直轄化します。

これは、ロシアが次第に勢力を南下させており、対外的な観点からの政策であったと説明されます。現地の動向がいったん落ち着いたら文政4年(1821)に、東西蝦夷地を松前藩に還付しています。この間、松前藩は奥州梁川(現在の福島県域)に領地をあてがわれて、内地の大名として存続していたのですが、それがまた蝦夷地に復活します。

さらに、幕末に入ると安政2年(1855)、幕府が蝦夷地を再び直轄化し、五稜郭戦争などを経て、明治政府に受け継がれ明治2年(1869)に日本の領地とする宣言がなされ、北海道と名前が変更されたのです。

八幡商人 西川伝右衛門

蝦夷地進出した近江商人の代

表といえる西川伝右衛門について紹介しましょう。

初代伝右衛門は寛永4年(1627)に生まれ、父吉重と同様に越後地方を中心に荒物や菓子子の行商からはじめ、その後は呉服や太物を扱っています。

蝦夷地に進出したのは、およそ慶安3年(1650)年頃と言われています。当時の松前藩は、江戸幕府から松前における支配を許可され本格的にまちづくりを進めている時期で、本州の商人たちにとっては新しくできた進出先としての好適地でした。だからこそ両浜組商人たちは、次第に松前に進出していったのです。西川伝右衛門もその一人で、最初は呉服・太物といった商品を持ち込んで商い、一方でこの地の材木を買い付けて、本州に送ることが中心であったようです。

元禄14年(1701)、2代目のころには、松前に支配人をおいて、出店経営を本格化させ、3代目のころには両浜組商人として活躍を始めます。伝右衛門が請け負っていたのは、タカシマやヲシヨロといった場所で、現在の小樽市域の場所が中心です。ちなみにこの後見学に行く豊会館(又十屋敷)の藤野家は、上ヨイチ・下ヨイチ場所から、東西

奥蝦夷地に広大な請負場所を持つに至りました。藤野家については、滋賀大学の坂野鉄也さんと堀井靖枝さんによる論文(※1)もご参照ください。

西川をはじめ、両浜組の商人たちが松前に置いている出店の店員、支配人などは近江の神崎郡、犬上郡、蒲生郡などの出身者が多かったようです。

一方で、各場所の運上屋(※2)などでは松前や出羽国の出身者が多く、松前の現地の人や東北から蝦夷地に働きに来ていた人を中心に採用していたようです。つまり松前の出店では近江出身者がほとんどであったとはいえ、蝦夷地の現地で実際仕事をやる人の出身は雑多で、他の地域では、近江商人の多くが近江の人を主に雇用していた状況とは異なります。

蝦夷地と本州を結ぶ船

滋賀大学経済学部附属史料館に寄託されている「松前渡海船絵馬」は、柳川の建部七郎右衛門家の手船を描き、海上安全を祈願して地元柳川の大宮神社に奉納したものです。

有力商人は、個人所有の手船で本州との廻漕を行い、手船を所持していない商人たちは、越前国河野浦、あるいは敦賀など

※2 運上屋:アイヌや出稼ぎ和人などを管理して、実際に漁業を営むための現地出張所のような施設。



図4 「松前渡海船絵馬」(柳川・大宮神社蔵、滋賀大学経済学部附属史料館寄託)

の船主の船を利用しています。こうした船を荷所船と呼んでいます。

荷所船で運ばれた蝦夷地からの物産は、敦賀に陸揚げされ、琵琶湖の北の海洋、塩津港などから、琵琶湖を経由し、京都、大坂の方にもたらされていました。が、やがて琵琶湖を経由しないで、下関を経由して大坂まで直送するという西廻り航路が発達

西川家文書にみる蝦夷地と近江の関係

近江国から離れた地域に出店を設けていた商家では、日ごろの出店運営に関しては支配人や手代といった奉公人たちに任せており、出店から書状や、棚卸し、経営帳簿などを近江国の本家に出送らせて、経営状態を把握して、さまざま指示を行います。それでも定期的に出店に向いて管理、指導を行うことがありました。その頻度は年に1回ぐらいでしょうか、かつて商家であった家にはその行程の記録が残っています。

主人が出店に向いて管理指導を行うことを店廻りと言います。近江商人の旅と言うと、やはり一番イメージが強いのは、てんびん棒を担いで、自自行商

していくと、敦賀―大津の、内陸ルート廻漕量はだんだん減っていきます。同時に、両浜組商人と非常に深い関係にあった越前などの荷所船の船主たちは、自ら各地に船を動かして取引を行いながら航海をする北前船に転化していくのでした。

北前船は船主自体が商人であって、蝦夷地においても自分たちが蝦夷地の産物などを買

の旅に出るというかたちですが、これは近江商人の創業期のことで、まだ出店経営を行っていない段階か、あるいは商品目録などを携えて、予約注文を取って商品を後で送るといふときに、てんびん棒を担いでの行商というものが行われました。

出店経営を行うようになると、かさばる品物は船などで出店まで運ぶわけですから、てんびん棒を担いで行商の旅をする必要はないのですが、今度は店廻りというかたちで旅をするようになります。近江商人は一生旅する商人であると言えます。

西川伝右衛門が蝦夷地と八幡の間を行き来した際の史料では、いつ、どこでどのような支出が

受けて、それを一番高く売れそうな港に持って行って売り、その港でも取引をして、物品を仕入れて、別のところに行つて利鞘をどんどん稼いでいくというものとして説明されます。

北陸の船主が自ら商いを行うことで次第に近江商人の勢力は衰退しますが、西川家や藤野家は明治になつても北海道で活躍しています。

あったかを克明に記載しています。さらに親類、檀那寺、町中の組頭などへの土産についても記された史料もあり、当時八幡へもたらされた蝦夷地の産物を知ることができます。

NPO法人たねや文庫の桂浩子さんが、柴谷家・西川伝右衛門家の史料を分析した論文(※3)を執筆されており、論文中では両家の当主による近江―蝦夷地間の行程や、土産品の一覧表なども掲載されています。

この論文中の地図では、柴谷家と西川家の行程を両方説明しています。西川家のルートを見ると松前を安政6年(1859)10月13日に出発して、11月9日から15日まで江戸にし

※3 桂浩子「近世・近代の史料に見る近江商人の旅」、『滋賀大学経済学部附属史料館研究紀要』50号、2017年
https://shiga-u.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=9614&item_no=1&page_id=13&block_id=21

ばらく滞在していますが、近江八幡にたどり着いているのが11月28日ですから、江戸滞在の日数を除いても1カ月以上かかる旅でした。このとき船は使いません。江戸時代の船というのは遭難する危険性が高く、商家の主人などが旅行をする際に、船に乗っていたら危ないので、人の移動と貴重品の移動に関しては、基本的に陸路を利用します。そして、商家の主人の旅には、必ずお付きの者が同行しました。

松前から八幡に主人が戻ってくる際には、やはり地元の人々に対するお土産を携えていたようで、蝦夷地らしい産物としては、棒鱈や帆立貝などが史料中に見られます。江戸では役者を描いた江戸絵や浅草海苔も買っており、さらに蝦夷細工物、テンキなどがあつたようです。蝦夷細工物はアイヌの人々による木彫りの手工芸品で、煙草入れや茶盆・糸巻などがありました。「テンキ」はテンキグサ、ハマニンニクという植物なのですが、この茎を乾燥させて、丁寧に編み上げた、アイヌの人々の伝統的な工芸品のことです。

このように、近江商人が蝦夷地と近江の間を往来することで、蝦夷地の文物が近江にもたらされることもしばしばあつたので

した。

「クナシリ・メナシの戦い」を知らせた書状

最後に、文書を介したつながりということで、一つ紹介しておきます。「万永代覚帳」という西川伝右衛門家文書中の史料の一つです。

「万永代覚帳」は、八幡の西川家本家で日々の記録を書き留めていったものです。ここには、松前の煎海鼠を大坂から長崎に向けて輸送したことに関する記事も見られます。記事の中で一番多いのは、各地の相場情報です。つまり、蝦夷地などからの商品をいつどこで売れば有利かということを判断するために、八幡で収集した相場情報が多数記載されており、一方では社会的な出来事についての記事も見られます。たとえば朝鮮通信使が八幡を通過したことや、アイヌの歴史研究の中で極めて重要な「クナシリ・メナシの戦い」の生々しい報告も記述されています。

寛政元年(1789)5月に蝦夷地で発生した事件の情報が6月にはすでに八幡の本家に届いていますから、この当時としては極めて伝達が速く、蝦夷地から本州に送られた「クナシリ・

メナシの戦い」についての最初の記録であると評価されています。ここでは「飛騨屋」という商人がクナシリに派遣していた商船、大通丸に乗っていた船頭などが、アイヌの人々の大規模な反乱の中で、死を遂げた」と書かれています。

飛騨屋久兵衛は、飛騨出身で江戸に拠点を持つ商人です。飛騨屋が請け負っていたのが、北方四島と現在言われている国後島にあった場所と、メナシという現在の根室市に含まれるところです。ここで、飛騨屋側の人々の横暴に耐えかねたアイヌの人々がクナシリ惣乙名サンキチたちの死を契機に蜂起し、現地にいた松前藩足軽1人・飛騨屋関係者70人が殺害されたのであり、この事件を「クナシリ騒動」「蝦夷騒擾」などと、当時は呼んでいました。

「クナシリ・メナシの戦い」の背景

享保期頃に、場所請負制が一般化してくると、近江商人も含めて請負商人たちは現地に運上屋とか番屋という現地出張所を建て、そこには、支配人・通詞・番人といった、現地で働く日本人が派遣されて、アイヌの人々を管理していくという流れになっていきます。

この際に、アイヌの人々が労働力として雇われるのですが、男女の賃金差があつたり、彼らを労働場所まで連れてくる附添番人(和人)に対してはアイヌの人より高額を支払ったり、漁獲物の買い上げ価格に関しても格差があつたようです。また、雇代の未払いや労働の強制、アイヌ女性への暴力など、さまざまな事態が現地では起きていました。

そういった中で、飛騨屋の場所において、それが集中的に発生したようで、クナシリからメナシにかけて、130人のアイヌによる大蜂起が発生します。これが、江戸時代最大で最後のアイヌ民族による蜂起となりました。

これに対して松前藩は、藩士260人を派遣し、蜂起は鎮圧されます。投降してきたアイヌの人々37人を松前藩は反乱の首謀者ということで全員処刑しております。謝罪してきたにも関わらず処刑したわけです。

鎮圧された後に、松前藩は飛騨屋に全責任を負わせるかたちで請負の中止を命令します。

当時の日本国内でも極めて高い関心がこの事件に寄せられ、日野商人の中井源左衛門家などにも関連する史料が見られます。

現在、根室の納沙布岬には「横死七十一人之墓」という碑が立っています。また、ノッカマップという所では、アイヌの人々を中心として、イチャルパという供養祭が1974年に始まり現在も続いています。なお、イチャルパは「横死七十一人之墓」の前でも行われています。

このように本州から商人たちが進出していくことに対して、アイヌの人々がそれをどのように受け止めたかということとは、きちんと考える必要があります。

ただ、アイヌの人々も日本人との関係の中で、自ら生活をどう主体的に営んでいくかということとを自ら選択していった部分がありますので、ただただ迫害されるばかりの存在ではなかったはずなのです。江戸時代の歴史の中で、日本人とアイヌがどのような関係を営んでいたのかというのをしっかり見ていく必要があるだろうと考えています。



蝦夷地と近江、歴史の中での関わり

近江商人を中心に蝦夷地と近江との関わりを見てきましたが、蝦夷地と近江すなわち現在の滋賀との関わりというのは、それを越えてもっと広いのではなからうかと思えます。鶴岡実枝子さんの論文「近世近江地方の魚肥流入事情」(『史料館研究紀要』3、1970)では、

「(江戸時代の敦賀港で)中期以降米に代わって主要な入津品となった松前物については、寛文中の入津品目中に、昆布・干鮭・串貝・いりこ・くじら・にしん・数の子の品名が挙げられており、敦賀港に松前物の入津が大きな比重を占めるに至るのは、この近江地方の魚肥需用の増大と、松前に於ける魚肥生産の発展に拘わるわけである」と記されています。

つまり、当時の蝦夷地からは、敦賀の港にこういった品物が大量に入ってきています。

江戸時代の近江国というのは、コメの非常に主要な生産地でした。江州米ですね。その中で、魚肥の需要が高まってきます。蝦夷地産のニシンを使用したメ粕のような肥料が松前から敦賀、敦賀を経由して近江国内

に入ってきて、近江国の農業生産を支えていたのです。こうした魚肥需要の増大が、松前から敦賀へのさまざまな「松前物」の流入の背景にあったということです。

さらに、魚肥を用いて採れたコメで近江の酒もつくられます。近江の人々の食生活、農業生産は、蝦夷地と切り離せない関係にあったのです。

蝦夷地に進出した両浜組商人のような、現地へ直接行った人々だけではなくて、近江の人々全体が蝦夷地の産物によって支えられていた部分があります。そのように考えると、現在の滋賀県で暮らしている私たちも北海道の歴史に対して、もっと関心を高める必要があるのではないかと思います。

歴史の中には、アイヌの人々が重要なアクターとして存在しています。三方よし研究所がこのことを認識しながら、近江商人を介した近江と蝦夷地との関係について研究を進め、現地との交流を深めていくことは非常によいことだと考えている次第です。

藤野四郎兵衛のお助け普請

初代は、農家に生まれ、寛政12年(1800)、北海道に渡り独立開業。松前からさらに奥地の釧路・十勝・根室方面の漁場を商圏とし、文政12(1829)廻船事業に進出し北前船七隻を持つまでになった。2代四郎兵衛の子、辰次郎は明治20年(1887)に分家独立し、

北海道開拓使が創設した根室の缶詰工場の払い下げを受け、サケ缶詰の製造を開始。明治24年(1891)には五稜北辰の商標を道庁よ



お助け普請で建設された豊会館

り譲与され、一段と信用を増した商品の海外輸出を始めた。この時作られた缶詰は現在マルハニチロの「あけぼのさけ」として受け継がれている。

旧中山道沿いにある豊会館(又十屋敷)は、藤野四郎兵衛の旧宅で、天保7年(1836)に建てられた。天保の大飢饉の真っ直中。東北の冷害や浅間山の大噴火などの災害で米価が高騰し、日本各地で餓死者が多数出たほか、百姓一揆や打ちこわしも頻発している時期であった。こうした時に藤野四郎兵衛が贅沢な屋敷や庭園を造り始めたという話が彦根藩の12代藩主、井伊直亮(なおあき)の耳に入り、直亮は激怒して奉行をさしむけた。ところが普請の現場では多くの人が雇われて賃金が支払われ、家族の分まで食事が与えられていて逆に直亮を感心させたという。

てんびん棒

中国武漢で発生した新型コロナウイルスは瞬く間に世界中に広がり、感染拡大防止策によって、本年は3月以降の様々な行事が中止・延期・縮小になった。学校にも職場にも行けない、県域をまたがった行動を慎むように、不急の渡航は禁止であり、世界中が新型コロナウイルスに怯え、当然ながら経済状況は悪化している。それでも月日は流れ、2020年も終わりに近づいてきた。

思いがけない事態はいつ起きるか予測できない。古今東西、疫病はこれまでも何度となく発生しているが現在地球全体の問題に広がっているだけに厄介そうだ。災害はいつやってくるかわからない。天災・災害は人生にはつきもの、こうした時にも平常心を失わないことを商家の家訓などでは戒めている。

塚本定右衛門家の『家内申合書』では「不運な時の大事なことは、戦線を縮小し、身を慎み、家の者は互いに和合して、ひたすら家業に励みながら時節を待つことである」とする。冷静な判断はいつも必要なことではあるが、厳しい冬を耐え、輝く春の到来が待ち遠しい。